入間地区退職校長会会報

いるま

第39号

令和４年２月１日発行

題字・発行者
会長　比留間 英雄

新たな地域づくりに一役を

副会長　吉　武　覚

今、私たちは「四人に一人は高齢者」といわれる超高齢化社会の中にいます。しかし、高齢者にとっては住みにくい社会です。

高齢者の占める割合が多いということは、年金や医療費を支えている働き手が少ないので「働き手が該当する分母は小さくなり、私たち高齢者が該当する分子は大きくなる」という現実は予想以上のものでした。高齢者にとって暮らしよい社会ではありませんが、悔やんでもどうにもなりません。人生百年といわれる超高齢化時代の転換期を、私たちはたくましく生きていかねばなりません。

年金基金増額の手助けは出来ませんが、増え続ける医療費を減らし、働き手の負担を軽減することは出来ます。いや、しなければなりません。今までは、病院が高齢者のサロンと言われていた光景があちらこちらで見られました。このことは高齢者が居場所もなく、暇を持て余している実情を物語っています。

昔は住居の近くには何らかのお店があり、何人かの暇人が集まりおしゃべりをしている光景がどこでも見られました。このことは、まず高齢者の居場所づくりが急務ということです。候補地は自治会の集会所です。自治会は高齢者の活動が活発になる計画には大賛成ですから、協力してもらえると思います。内容は、高齢者に人気がある囲碁・将棋、カラオケ、お茶会などがよいでしょう。

高齢者が生き甲斐を見つけ、地域で元気に活動する姿は、単に高齢者の健康づくりだけではなく、衰退を続ける地域の再生につながるはずです。

この目標達成のためには、会員の力で自治会に働きかけ、高齢者の健康づくりと生き甲斐づくりの重要性を訴えて欲しいのです。「校長は、地域にお願いはするけれど地域のための協力はない」の批判を払拭しようではありませんか。

啐啄同時

入間地区中学校長会
会長　斉　藤　国　明

雛鳥が殻を破って生まれ出ようと内側から殻をつつくことを「啐」、親鳥が外側からつつくことを「啄」、両方が一致して雛が生まれる。この瞬間を「啐啄同時」という。一人一人の子どもが自分のペースで伸びようとしているその機を逸することなく、成長を支援するのが教師の役目である。…先輩に学んだ、語り継ぎたい言葉です。

子どもたちは教科の学習だけでなく、様々な活動を通して育ちます。体験による学びは子どもたちの成長にとって大切なものです。新型コロナウイルス感染症の拡大で、多くの学びの機会が奪われましたが、一方で子どもたちが当たり前にできていたことへの有難さに気づき、何気ない日常の中で感謝の言葉を多く耳にするようになりました。

今、感染症とともに生きていかなければならないという認識に立ち、万全な感染症対策を講じながら、子どもたちの健やかな学びを保障していくことが求められています。長い夜が続いていますが、明けない夜はありません。私たち校長が強いリーダーシップを発揮し、学びを止めないという覚悟を持って、子どもたちが伸びる多様な学びの場を取り戻していきたいと考えております。

新学習指導要領の円滑な実施、学校における働き方改革の推進、ＧＩＧＡスクール構想の実現、また虐待・いじめ・不登校対応など、取り組むべき教育課題は山積しています。校長の横の繋がりを大切に、校長会の学びも決して止めることなく、力を合わせて課題に取り組んでいく組織でありたいと思います。

結びに、入間地区退職校長会の諸先輩方が培われた実践とご指導に心から感謝するとともに、皆様のご健勝とさらなる発展を心よりご祈念申し上げます。今後とも学校教育の一層の充実と発展に向けて皆様のご支援・ご協力を何卒よろしくお願いいたします。

（飯能市立美杉台中学校）

研究協議会　紙上発表

組織力で推進する学校経営

川越市立今成小学校
校長　井口　修一

一　はじめに

今成小学校は、川越市中心部の西側に位置し、住宅地と水田を中心としたどこか懐かしい風景の学校です。しかしコロナ禍のため、特色ある行事は全て中止となり、学校の教育活動も感染対策を優先するため、中止や規模の縮小となったものは数知れません。このような中でも、子どもたちには、かがやきをもって学校生活を送り、学んでもらえるよう、目指す学校像を「一人ひとりが、いつでもかがやく学校」としました。

二　経営方針の共有と浸透

職員個々の力量に頼っていた時代は終わり、組織力で学校を動かしていかなければならない時代に入っています。校長の経営方針を職員が共有し、協働関係を築いていくことが必要です。すなわち、職場の中に学び合い、高め合い、鍛え合う組織風土をつくり、教職員全体の力量を上げることが必要です。そのためには、学校教育目標の実現に向け、教職員全員が「どんな学校をつくりたいか」「どんな子どもを育てるのか」「どんな教師を目指すのか」の目指す像を共有し、「チーム今成小」として教育活動を推進していかなければなりません。

感染対策のもとに実施された校内音楽会

三　具体のイメージ

年度当初、本校の現状と課題を職員と共に洗い出し、目指す学校像を掲げたグランドデザインを示しました。学校像を達成するための活動方針を、①学年・学級経営（心がかがやく）、②学習指導（学びがかがやく）、③安心安全（保護者とかがやく）、④地域との連携（地域とかがやく）⑤教員の働き方（教師がかがやく）の五つとし、その下位に各方針を掲げました。これにより、学校運営や教育活動の方向性が具体的でイメージしやすくなり、教職員の「実践したい」という動機付けが強くなりました。

四　個の目標管理

前記の五項目を学級に当てはめた学級グランドデザインを各担任が作成し、従来の学級経営案に代替するものとしました。これにより、常に経営方針を意識した学級経営に取り組むだけでなく、保護者にも配布しました。また、この学級グランドデザインは、人事評価シートとも関係づけ、個の目標管理にも位置づけるようにしました。

五　結びに

今成小学校は、保護者・地域の皆様のご理解とご支援をいただきながら、落ち着いた教育環境の中で、規律ある学習ができる状況になっています。「今成小で学んでよかった」「今成小の先生に教えてもらってよかった」と言われるよう、保護者や地域の方の期待や要望を受け止め、目指す学校像や児童像を教職員全体で一致させ、教育活動を進めていきたいと考えています。

主役は子ども、生徒と創る向陽中学校

所沢市立向陽中学校
校長　沼田　芳行

一　はじめに

昨年度から世界を襲った新型コロナウイルス感染症。その勢いはとどまるところを知らず世の中を席巻しました。学校もご多聞にもれず、様々な対策を練りながら、今日まで何とか教育活動をつなげてきました。私が本校に着任したのは昨年四月でしたので、いきなり休校の二か月からのスタートでした。四月当初の職員会議で今年度の方針を出したのも束の間、五月の職員会議で「コロナ禍仕様」にモデルチェンジした経営方針を再度提案し直しました。

二　今だから、目指す学校像

何よりも大切なものは「命」です。子どもの「命」以上に守るべきものはありません。そこでまず、目指す学校像を「誰もが安心して過ごせる学校」にしました。子どもを起点としてそこに集う皆が共有する理念です。学校教育目標を具現化するための最上位目標です。すべての教育活動を進めるにあたり、このことに立ち返る、そんな学校づくりを始めました。

三　生徒会本部と共に

昨年度、そうした方針を掲げ、生徒主体の学校づくりを進める中で学校教育目標を生徒会本部役員生徒と論議を重ね、改編しました。私自身、このように取り組むのは初めての経験です。子どもたちは今の学校の現状を様々な角度から見つめ、分析し、今年度から「自律・貢献・共生」を掲げ、教育活動が始まりました。私が投げかけるよりも、生徒会長が朝会で話した言葉には繊細で透き通った趣がありました。私たちが創った私たちの財産、そこに集う皆がどんな力を三年間で携えていくのか、「自

分で考え行動できる生徒」という目指す生徒像へ向けても素敵で和やかな営みにつながりました。

四　コロナ禍でできたこと

昨年は本校の五十周年記念の年でした。しかし、四月、準備してきた大人の実行委員会では式典等中止にせざるを得ず、暗い会議となりました。ここでも生徒に委ね、生徒会を中心に子どもたちが本校の五十年を振り返り、皆で取り組める企画ということで校舎に巨大な絵を掲げる「ジャイアントアート」を実現させました。「これまで」にこだわることなく、「これから」を大事にした営み。新たな時代の学校のあり方を予感させる行事となりました。この取り組みは今でも地域や卒業生の間に語り継がれています。

50周年記念ジャイアントアート
<縦12m 横60m>
～全員で分担し１日で仕上げました～

五　対話型芸術鑑賞の実施

本校ではこの九月から朝の十分間を月二回、先生と生徒が芸術作品を媒介に正解のない答えを導き出す対話型鑑賞に取り組んでいます。子どもたちが思ったことを口にできる時間。生徒は早くも「人と人の感性がこんなにも違っていて、自分の心と対話できる時間になっている」「朝こうして考える時間があることで、自分の創造性がふくらんでいくのがわかる」との声を発しています。二十一世紀型スキルに着目し、生徒の新たな可能性を伸ばすことにチャレンジしています。

六　結びに

多くの方々に支えられて可能になる毎日の教育活動。感謝の念を大切に、生徒と創る学校を今後も営んでまいります。

無理は承知の上で

所沢班　大磯　宏

定年退職後、いろいろな仕事をしていましたが、去年の三月ですべて終了。四月からはのんびり過ごしていたのですが、五月半ばから小学校の常勤講師として働くことになってしまいました。

職探しから教壇へ

仕事から離れていた時に、今までやったことのない仕事をしてみようと思い、ハローワークへ。そこで職探しをしていたところ、小学校教員の募集が目にとまり、担当者に問い合わせてもらったら、すぐに面接。その結果、小学校の臨時免許状を取得した上で、五年生の理科と六年生の社会科を担当することになったわけです。

小学校教諭としての経験は全くなし。戸惑うことばかりで、あたふたしつつ失敗も多いのですが、授業中に見せてくれる子どもたちの真剣なまなざしや、授業後に寄ってきて話す何気ない会話に元気をもらい、教壇に立っています。

年相応に課題のある体で

高齢者となり心がけていることは、まず睡眠時間の確保、体調の管理、食事のコントロール、適度な運動、そして定期健診とかかりつけ医とのコミュニケーション。

勤務内容では、とにかく無理をしないこと。欲張らないこと。ゆったりとした指導計画を立てること。過信しないこと。新しい指導法を取り入れていくこと。

言うは易く、経験のない理科と社会は想像以上に難しく、資料の作成や実験の準備に追われる日々が続いています。それに加えて、忘れ物をしては職員室に戻る回数の多いこと。大いに反省しているところです。

自分らしい工夫

さらに、自分の持ち味を生かした授業にしたいと、試行錯誤しています。子どもが中心となって活動する場や、体験をさせ小さな失敗から学ばせる場の設定。全体が把握できるように図式化した板書。ＩＣＴを活用した授業など。工夫すること自体を楽しんでいるのかもしれません。やりすぎないよう、体力と相談しながら工夫しているところです。

期待して

さらに、私の切り替えスイッチである通勤時の読書、土曜日のコーラス練習、時に行く観劇、孫たちと過ごす時間、そして日曜日の教会。これらが化学反応を起こして、今の仕事を私にしかできないものになるのを期待しているところです。

６年生社会科の授業

私の音楽ボランティア

入間東部　森元　州

月日が経つのは早いもので、教育の第一線を離れて四年が過ぎようとしています。

今、私の生活の中で、とてもやりがいを感じていることの一つは、ボランティアで学校に出向き、音楽の授業をさせていただくことです。

音楽の教員としてスタートし、日々、授業や部活動に明け暮れていた三十八歳の時、指導主事として教育行政に携わることになりました。以降、ほとんど学校を離れ、直接、授業をする機会はなくなりました。

日々、子どもたちと共に教育実践をしている先生方を、羨ましくも思い、いつの日か、子どもたちと集大成として授業をやってみたいと心の隅で考えていました。

退職後、音楽の研究会や授業の指導者としてお声がけをいただく機会はありましたが、ある時、知り合いの校長先生から、初任者のために授業をすることを依頼され、はからずも、永年思い続けていたことが実現しました。

音楽の授業を終えて

それを契機に、県内各地に教え子のピアニストとともに、出前授業に出向いています。

これまでの経験や知識を総動員させ、改めて、学習指導要領や教科書を紐解き、試行錯誤する苦労はありますが、子どもたちと共に音楽を創り上げる授業ならではの醍醐味があります。

授業の目標、導入、展開、まとめをはじめ、発問、子どもの反応などを予想し、今さらと思いつつも改めて指導案の大切さを認識させられ、若い時、指導いただいた諸先輩の顔と言葉を今となっても思い出されます。

音楽は、「音を楽しむ」ことであり、「音が苦」となっては、感動など生まれません。

授業を通して、音楽のよさや楽しさを感じ、何より、子ども一人一人が生涯にわたり、音楽のある、豊かな人生を送れるよう、ささやかな願いを込め、そして、子どもたちの笑顔に元気をもらい、種まきを続けています。

がい

『飯能戦争秘話』を後世に伝える

日高　髙野　豊

「退職後の生活は面白い。そう言えるよう心掛けよ。難しいことだが……」と諸先輩からよく忠告された。今、そのことを実感している。

令和三年、渋沢栄一の生涯を描いた「晴天を衝け」が放映されている。八月二十二日には賊軍の汚名を着せられた振武軍と官軍との闘いを描いた「飯能戦争」の場面が放映された。渋沢平九郎の自刃の場面が強く印象に残るが、尾高惇忠や渋沢成一郎等が横手村（現日高市横手）の村人の助けを得て逃げ果たせたとの台詞もあった。

昭和四十五年、この地に住む歴史研究家が、振武軍と横手村の村民に関わる史実『飯能戦争秘話～横手三義人～』を著した。まさに放映された「横手村の人の助けによって…」の件である。

以前より、この飯能戦争秘話を後世に伝えて欲しいとの要望があったが、果たせずにいた。そんな折、粟田良助先生(故人)が、この小本を参考に歴史小説『助けてやらにゃあ』を執筆、二〇一五年に出版された。渋沢栄一が注目されている今をおいて、後世にこの史実を伝える機会はないとの思いを強くした。

そこで、二〇二〇年一月、「横手三義人頌徳記伝承の会」を組織し、最初の取り組みとして、二月二十二日に彰義隊の歴史に詳しい比留間英雄氏に講師をお願いし、講演会を実施した。幸運にも新型コロナ感染拡大前であり、約八十名の参加者にマスクを配布し、盛会裡に終えることができた。

講演会「飯能戦争を語る」

多くのイベントが中止になる中、五月二十八日には「幕末飯能戦争、振武軍の足跡を歩く」という企画に参加した。振武軍が拠点とした能仁寺から出発し、天覧山、多峯主山を通り、尾高惇忠や渋沢成一郎等が官軍から逃げたであろう山道や旧道を横手まで、その場面を想像しながら歩くことができた。

退職後の生活を面白くさせるには、思いを実行に移すことと再認識した。

生き

マジックで笑いを届けて

所沢　松岡　幸雄

二〇一一年三月、東日本大震災の発生直後のマスコミ報道を見聞きして、じっとしていることができませんでした。被災者に何としても元気を届けようと、その後九年間、五十日を超えるボランティア活動を続けてきました。

東北三県で、ガレキの片付け・今の生活の様子を聞く・子どもたちと遊ぶなどに加えて、特技の「漫談マジック」を披露してきました。多くの避難所や仮設住宅の集会所を午前・午後と二回に分けて巡ったり、今日は宮城県石巻市、明日は隣の女川町と…。ある集会所は五十人程で満席になり、窓から覗いてまでの盛況でした。終わって「いやー、あの時以来、初めて腹の底から笑えました」とか「また来てねー、必ずねー」と満面の笑顔と握手攻めに合いました。私の耳に今でも残っています。数年後「あーら、松ちゃんじゃないの」と私を覚えてくれた方がチラホラおられました。

孫を・親を・祖父母を亡くして「自責の念」に苦しんでいる方、今後の生活の不安で悩み苦しんでいる方々に「笑い」は「心の復興」に欠かせません。

その後、所沢近辺の小学校・児童館・公民館・自治会・高齢者施設などで「驚きと笑い」を届けており、とても楽しい私の「生きがい」です。

所沢・こどもの未来館にて

※松岡氏は十一月に急逝されました。
ご冥福をお祈りいたします。

テニスに魅せられて

坂戸　松井　正樹

私とテニスとの出会いは、退職後、坂戸市の教育センターでお世話になっていたころです。指導主事の先生から自分が所属しているテニスクラブへのお誘いがきっかけでありました。

「テニス（硬式）ご一緒にやりませんか」「お誘いいただき嬉しく思いますが、私はテニスの経験がなく、サーブはおろかレシーブもままならないですよ」とお返事したところ「いいんです。自分たちのメンバーは、子育てや仕事の関係で活動できる人数が少なく、参加していただくだけで助かるんです」。

その当時、運動不足で汗をかく生活習慣がなく体重が気になっていたこともあり、「チーム・リバティー（チーム名）」に入会することとなりました。

チームのメンバーは、学生時代からテニスを続けていている経験者が多く、一緒に活動することが大変でありました。しかし、チームの方針として、基礎練習の時間を他のチームより多くとっていたこともあり、初心者の私にとって上達の手助けとなりました。

チームは、日高市のテニス協会に所属し、年間（春、夏、秋）を通して各種大会があります（今年は、コロナ禍のため中止）。春、秋は個人戦、夏は団体戦が組まれています。個人戦では、私に誘われ入会した義弟とダブルスを組み、シニアの部（五十五歳以上）にエントリーし、参加しています。私と義弟は初心者のため、予選リーグで上位グループに入ることは厳しいですが、同じ負けでも、技量が上がるにつれて、ゲーム数を多く取ることができたり、時には、勝利することもできたりします。大会後の反省会（祝勝会）も楽しみの一つです。

コートで出会う方や試合で対戦した方々と親しくなり、お互いにメンバーが足りない時などはチームを超えての交流もあります。「松井さん最近腕前を上げましたね」などと声をかけてもらうこともあり、励みとなっています。

団体戦（Ｂリーグ）優勝時のスナップ

会員の声

古希を迎えて

越生　河野　孝

退職して早十年ですが、その間、町の生涯学習課で社会教育の経験をさせて頂きました。その中でペタンクの振興にも関わることが出来ました。まず町主催で「ラジオ体操・ペタンク教室」を毎年行いました。参加者の中から続けて練習するグループが誕生し、町内数カ所で定期練習が始まりました。そして今は越生ペタンク連盟の設立も出来、埼玉県ペタンク・ブール連盟の傘下で試合や練習をしています。

埼玉県は全国でもペタンクが盛んで、会員数も多く力強く活動しています。過日は秩父市で日本選手権大会が実施され、男女ともに埼玉が優勝しました。私も県連盟の役員として大会運営に携わり、家内も審判員として二日にわたり大会に寄与することが出来ました。さらに喜寿を目指して頑張ります。

初めての野菜づくり

入間　星　純一

近年母が高齢となり、趣味だった野菜づくりを私が引き継いだ。苗を買いに行ったときのこと。「まだ寒いので、早く植えすぎると苗が風邪を引くよ」と店主が言った。野菜を我が子の様に思う言葉が、なぜか印象に残った。

やってみると野菜づくりは大変だった。病気や虫が容赦なく襲ってくる。しかし、毎年経験を重ねる度に、野菜づくりに必要なことが見えてきた。成長を日々観察し、野菜との対話が大切だと分かってきた。「苗が風邪を引く」という言葉が繰り返し心の中で響いた。

現役当時、どれだけ子どもたちや保護者、先生方と対話できていたか、実に自信がない。野菜などと、簡単に考えていた自分が恥ずかしい。何を通しても学ぶことがある、と気づかされた。

ただいま修行中

川越　和栗　智巳

退職後、市教委の生徒指導担当、大学講師、川越警察の少年指導委員、日体大特別教授（教育実習担当）、ＫＪＢＡ（川越ジュニアバスケットボールアカデミー）の立ち上げなど様々な経験をさせていただきました。

現在は、川越市シルバー人材センターの会員として、川越の氷川神社で筆耕の仕事に携わっています。まさか、人生の最後の仕事で六十歳にして手習いなど、私の人生設計にはなかった事ですが、日々御朱印帳と格闘しています。

また、この四月からオーバー五十歳のバスケットチームのコーチの依頼を受け、毎週土曜日の夜、練習しています。五十歳の成人の指導は難しい一面もありますが、すべてが修行だと思い、体が続く限り頑張ろうと思います。

庭づくりの楽しみ

日高　高麗　孝道

新型コロナウイルスの影響で趣味の旅行にも行けなくなり、どうやって時間を過ごすか真剣に考えました。その結果、ずっと放置していた庭を何とかしようと思い立ちました。我が家の庭は無駄に広く、一部を除いて整地されていなくて、草だらけだったからです。

そこで、まず草を抜き、土を掘り起こして整地しました。次に、業者が置いていった石を並べて花壇を造ったり、ホームセンターで買った植木や芝生などを植えたりして何とか庭を造りあげました。この間約一年半、高齢者の身にはかなりこたえる肉体労働でしたが、少しずつできあがっていく庭を見るのが楽しく、全く苦にはなりませんでした。今では老後の生き甲斐になっていて、これから何を育てようか考える毎日です。

自分自身のさらなる進化・成長をめざして

川越　飯嶌　晴美

定年退職後、五年間の新任教員指導を終え、この三月末をもって学校現場を完全に退いた。

今後は人に教えるより自分の学びに専念する。今、その楽しさを実感している。「知」「徳」「体」バランス良く学び、自分自身の「人格の完成」を目指す。その「体」の分野では退職後マラソンと登山に傾注。マラソンでは後半速度が落ち、抜かれまくる原因が鉄分不足と分かる。鉄分を補い、フルマラソンで十分、ハーフマラソンで五分自己記録を更新した。他の大会でも記録更新と意気込んだ矢先、コロナ禍でこの二年間全大会が中止。毎月二百km以上を目標に走り込み、大会再開後の自分の進化に期待。登山は日本百名山踏破を目指し、三十二山制覇し残り六十八山。有限な時間と機会を生かしたい。

スポーツクラブ

入間東部　天野　豪雄

十年前、新任の校長として中学校に着任した。教頭時代と比べ、体を動かす機会が激減し、健康診断では各数値が上がってきた。これはいけないと痛感し、近所にあるスポーツクラブに入会した。

初めは教わった基本的な運動をしていたが、徐々に自分で工夫しながら筋トレ等にも取り組んでいくようになった。クラブで運動した後は食事が美味しく感じられ、睡眠もよくとれるようになった。しかし、現役時代は仕事が忙しく週一～二回しか通えなかった。

退職後は通う回数も増え、今では週三～四回は行っている。長く通っていると顔見知りの人も増え、世間話をしながら運動することも多い。これからも通い続けて健康の保持に努め、明日からの生活をアクティブに送っていきたい。

地域の中で

所沢　坂上　健壽

現職の時は、勤務校と地域との連携を柱の一つとして学校経営に努めてきた。しかし、自身が住む地区との関わりは薄く、何事も周りに任せきりの状態であった。

そんな私だが、退職後に地区のイベントの実行委員長、地元神社の役員、そして自治会の会長等の様々な役職への要請があり、微力ながら責任を果たしてきた。中でも自治会の会長時代は、区民の高齢化が進む中、活動をいかに活性化させるか腐心した思い出が残る。

現在私は、高齢者を対象に百歳体操や健康体操を主催している。健康づくりやコミュニティーづくりが目的である。コロナ禍で運営が難しいが、好評なので続けたい。

来年には、地区の長生クラブ会長になる予定。要請に対し地区への恩返しのつもりで受諾した。

子どもたちの心の健康を見つめて

入間　喜多川　通代

退職して二年目、今年度から所沢市立教育センターで電話相談員をしている。これまでの経験を活かせる仕事でもあるが、声だけで相手の思いを受け止めることはかなり難しい。電話相談から面接相談への橋渡しをするのも仕事の一つであり、相談が円滑に進むよう傾聴を心掛けている毎日である。

また、本センター内にある適応指導教室「クエスト」の小六から中三までの児童生徒を対象とした「ぷりずむ」においても個別の学習や集団行動（栽培や調理、進路等）の支援もしている。ここでは、子どもたちの心の健康状態を見守りながらスタッフや担当相談員との情報交換を大切にしている。

日々、子どもたちの眼の輝きや笑顔を通じ、一人一人の成長を実感することが活力につながっている。

花づくりを楽しむ

飯能　山下　利明

退職後、市内三つの小学校の特別支援学級の児童と春と秋、約二百株ずつの花苗づくりを続けている。春は赤・白・青のサルビアやマリーゴールド。秋はパンジーやノースポールなどである。

我が家の小庭で種を蒔き発芽させ、それを児童と話をしながら黒ポットに植え替える。児童は上手にでき、その後の世話もよくできている。大きく育てた自前の花苗で学校を飾る。誇らしい気持ちの児童と楽しい時を共有している。

きれいな花を咲かせるまでには時間と手間だけではなく失敗から学ぶ姿勢も必要である。苗は適時を逃すとよい花を咲かせない。人もまた同じような気がする。小学校時代がその時だろう。自然と向き合う多くの経験が現実と仮想の線引きの礎となると思う。

至福の時間に思うこと

狭山　長沼　文彦

始発のバスと電車を乗り継いでいた頃に比べ、週三日、車で片道十分にある今の職場にはとても感謝しています。平日に二日間の休みは、新鮮で貴重で、無事に勤め上げたご褒美だと思っています。

そんな私の現在の悩みは、「一日が短か過ぎる」こと。五時起床、新聞に目を通し、十七歳の老犬との散歩の他に、少しの頼まれ家事をやり終える頃にはもう昼に。

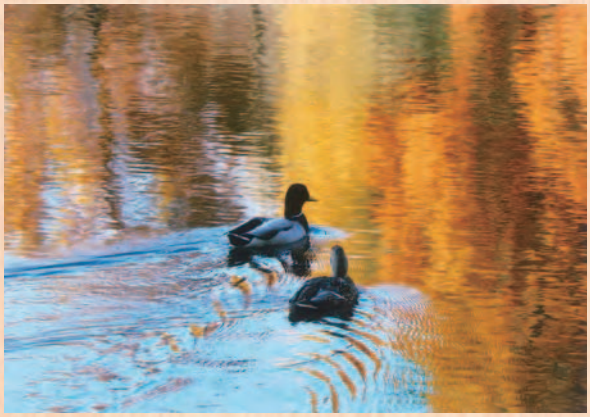
食後は、コーヒーと『ひるのいこい』が、山形の子ども時代に連れていってくれます。やがて我に返り、「よし、もう一仕事」とウロウロし始めると決まって聞こえてくるのが至福の時間終了を告げる『夕焼けチャイム』なのです。

使えなかった年休と一緒に沢山の時間を預けた『銀行』に、私の時間を取り返しにいきたい思いです。

作品の窓　写真

「春のおとずれ」　入間東部　浅見 隆志

「光のアーチ」　狭山　廣澤 和夫



「もみじのランデブー」　狭山　船田 朋美

「ウズベキスタンの花嫁」　川越　村田 剛徹

「我家の育苗バラ」(プリンセスド モナコ)　所沢 菅野 俊臣

「新たな世界へ」　入間　清水 孝

皆様の作品お寄せください

会員の皆様の幅広いご趣味を「作品の窓」でご紹介ください。絵画・写真・工芸・書・短歌・俳句・川柳・詩・焼物・手芸・七宝焼等々ジャンルは問いません。

各市町の代表理事、あるいは会報編集委員にお声がけください。

作品は、写真に撮ったものを掲載させていただきます。

編集後記

心のこもった玉稿、貴重な写真などを掲載した三十九号をお届けいたします。教育推進研究協議会は昨年同様、本紙にての発表となりました。コロナ禍での学校運営等、現職校長のかつてない実践例などご報告いただきました。巻頭言にもありましたが、会報が学校、地域の中で何かできることをと、「歩」を進める情報提供となれば幸甚です。

（熊本）

入間地区退職校長会会報
第三十九号
発　行　令和四年二月一日
発行者　会長　比留間英雄
越生町成瀬一四一－一
印刷所　六三四堂印刷株式会社